

風を起こす

<第32回>

かんなんしんくなんじ

艱難辛苦汝を玉にす

大仙市会計管理者兼会計課長

進藤 久さん

困難にぶつかった時こそ、人間の真価が問われるという。一見、困難と考える仕事であって、とらえ方を変えることで、自らを成長させるためのチャンスに変わる。

全国初となった行政代執行

「大曲の花火」で知られる秋田県大仙市。華やかな夏の風景とは違って変わり、冬は辺り一面が深い雪で覆われる。雪解けにはまだ早い2012年3月5日、市の中心部にある小学校の正門前で、全国初となる空き家の行政代執行が行われた。

「ただいまから、代執行令書に基づきまして、空き家解体と撤去の工事に入ることを宣言いたします」——その声を合図に、油圧ショベルがアームを動かし始めた。けたたましいエンジン音を響かせながら、積雪で押しつぶされそうな空き家を解体していく。その模様はNHKの報道番組の他、全国ニュースでも伝えられた。

人口減少時代に入り、空き家問題は全国的に深刻化している。条例制定が相次ぎ、

そこに「行政代執行」を盛り込む自治体も現われてきたが、いざとなるとハードルは高かった。そんな中、条例制定からわずか3カ月で実施に踏み切ったのが大仙市だった。当時、総合防災課長として現場を指揮した進藤久さんは振り返る。

「私たちは、条例に基づいて淡々と業務を行っただけです。危険な空き家を撤去したこと、子どもたちも安心して通学できるようになりました」

姿勢を学んだ2人の上司

秋田県立農業短期大学で学び、県の農業改良普及員を目指していた進藤さんが大曲

1956年、秋田県大曲市（現大仙市）出身。秋田県立農業短期大学（現秋田県立大学生物資源科学部アグリビジネス学科）卒業後、1977年、大曲市役所（現大仙市役所）に入庁。保健衛生課国民健康保険係に9年間在籍後、1985年に総務課電子計算係に異動。1994年から税務課で固定資産税を担当した。収納推進課に2年在籍後、総合防災課長に着任すると、全国初の行政代執行を実施した。家族は妻と東京南青山で美容師をする長男と長女。趣味は30歳の時に始めたゴルフでオフィシャルHCは現在12.2。

市役所（現大仙市役所）に入庁したのは、両親のたつての願いを受けてのことだった。実家は代々続く稲作専業農家。「サラリーマンになるなら、せめて近くで」——長男として、両親の意向を聞き入れないわけにはいかなかった。

入庁後、配属されたのは農業と無関係な保健衛生課国民健康保険係だった。

「ちょうど2年に1度行われる国民健康保険証の書き換え年で、しかも手書きの時代でした。アルバイトの方も一緒に、必死にな





1

写真上から

1. 雪下ろしされないままの屋根の積雪
2. 雪の重みによって崩れ落ちた空き家
3. 行政代執行の様子は全国ニュースでも伝えられた
4. 5. 油圧ショベルによる空き家の解体作業



2



3



4



5

つて住所と名前の書き換え作業をしたことを覚えていきます」

同じ部署には、県下をリードするプロフェッショナルが2人いた。1人はレセプトの請求事務を何十年も専任してきた主任で、地元医師会にも一目置かれるベテランだった。

「おふくろと同世代で息子のように可愛がってくれた上に、仕事の基礎を厳しく指導してくれました」

もう1人は課長補佐で、とりわけ第三者行為求償事務において成果を上げていた。

第三者行為求償事務とは、交通事故など「第三者（加害者）の行為」によるケガの治療費を、保険者（市町村）が一旦立替えた後、加害者に請求すること。第三者行為による治療は、被保険者の届出がなければ、医療機関からのレセプトを点検して見つけ出せない。

「当時はモーターゼーションに伴って、自動車事故が急増していました。全国的に不正請求が増加している中であっても、部署

内には、不正はいち早く見つけ見逃さないという使命感が満ちていました」

進藤さんは仕事の手本とした課長補佐の後ろ姿から、公務であつても成果にこだわること、実績を残すことの重要さも学んだ。

どこにも無いものを作るっ！

9年間在籍した後には配属されたのは、総務課電子計算係だった。市では戸籍をはじめ水道事業、財務会計などの電算処理システムを職員たちが自前で開発していた。

「単に電算化するというのではなく、未だどこにも無いシステムを作るんだ、売れるシステムを作るんだという気概をもって、皆、仕事をしていました」

スペシャリスト集団に混じって、進藤さんはCOBOLなどプログラム言語を一から学んだ。

「特に、例外は全部つぶしておけ」ということを叩き込まれました。どんなケースでも

対応できなければ、役所のシステムとして使えない物になりません。そのために、まずは例外を徹底的に洗い出すのです」

精度の高さを追求しつつ、期限内に成果品として完成させなければならぬ。残業は当たり前、土日出勤もいとわなかった。帰宅後はビールが欠かせないし、かと言って運動をする時間もない。「痛風が宿る部屋」と揶揄されるほどハードな部署だったが、進藤さんは仕事がおもしろくて仕方なかった。

「もともとモノづくりは好きでしたから、より使いやすくするにはどうしたらいいか、あれこれ考えてプログラムする。思い通りに形にできた時はもちろん、うまくできない時も仲間と喧々諤々やりながら作るのが楽しかったですね」

その最大の成果が市民を対象とした健康管理システムだった。進藤さんが目を着けたのは、低コストで導入できるバーコード。受診者への郵送ハガキにバーコードを印刷することで、健診会場で過去の受診結果を瞬時



空き家が危険度に応じて、赤、黄、青に色分けされた「空き家マップ」。災害時の避難場所も記載されている

にパソコンから引き出すことができる。システムには健診結果を有効に活用するための仕掛けも施した。

「健診結果の数値によって、赤・黄・青のマークが付くようにしたんですよ。例えば最高血圧が160以上だったら赤というように、受診者の健康状態を感覚的につかむことで、保健指導をしやすくなりました」

地域ごとに再検査の緊急度の高い人を探し出すなど条件検索もできる画期的なシステムは、先進事例として注目を集め、進藤さんは事例発表で各地へ出向いた。「よそに負けないものを作る」——その姿勢が一つの実を結んだ。

税務課の経験が空き家対策の根幹に

その後、税務課に異動し固定資産税を担当する。それはまさに土地と家屋の評価だった。

「固定資産税の算定基礎となる家屋調査では、設備も含めて細かくチェックします。柱材は杉か檜か、まきめ桁目だったら価値が高いといった具合に素材を見て単価を調べていきます」

6町1村の合併が行われた2005年を含めて17年間の経験が、次の特命につながる。空き家対策だ。

「家屋調査を長年やってきましたから、空き家でも一目見るだけで、どこが傷んでいて、どこが危険かわかりました。税務課で培っ

た判定力や判断力が、空き家対策の根幹になりました。もちろん所有者の問題も」

特命を受けた進藤さんが総務部総合防災課に着任したのは、折しも2011年4月。東日本大震災の発生直後で、社会が混乱していた時期だった。しかも、隣の県が甚大な被害を受けている。進藤さんは総合防災課長として被災地支援に奔走した。

「市長の命で、まずは津波被害が大きかった岩手県沿岸部でがれき撤去をするため、内陸部の岩手県遠野市に後方支援基地をつくりました。そこから毎日30人の市民ボランティアを派遣したのです」

それがひと段落すると、今度は被災地の人々を慰労するため大仙市内の温泉施設に招待した。被災地支援に追われた最初の半年間は、空き家対策まで手が回らなかった。ようやく手を着けられたのは、10月に入ってから。

「条例づくりには当たっては、既に制定されていた他の自治体の条例を参考にしました。解体費の補助も行政代執行も盛り込みましたが、罰則だけはあえて入れませんでしたね」

システムを応用した空き家マップ

「大仙市空き家等の適正管理に関する条例」は12月の市議会を経て制定された。「空き家等防災管理システム」開発のための補正予算も承認された。

年が明けると、事前に実施したアンケート調査を基に自治会長宅を訪問し、具体的

にどこが空き家なのかローラーをかけた。臨時職員の協力も得て集まった1400軒以上の空き家情報は、地図上で一覧できるシステムに落とし込んで「空き家マップ」とした。システムのベースは、税務課にいた頃に開発した固定資産税の路線価付設業務システムである。

「空き家マップには、危険度に応じて赤・黄・青のマークを付けました。市民の定期健診のためにつくった健康管理システムと同じ手法です」

空き家マップには災害時の避難場所を記載し、防災マップとしても活用できるようにした。それをA0判サイズで出力後、ラミネート加工し、自治会長全員に配付した。

「空き家情報を市民と共有していく。そのためにも、空き家マップを、使えるマップにしたかったのです」

私にとって、あなたは神様

全国初の行政代執行と話題になった大仙市だが、それ以前にも進藤さんは3軒の危険空き家解体に関わっている。2年間に在籍した収納推進課で、空き家の所有者から解体の同意を得たのだ。空き家が放置される原因の一つは土地売却の煩わしさ。進藤さんはそこにアプローチした。

「所有者に、滞納している税金〇万円を払ってください」と言うと拒否されます。でも、更地にして、お隣に買ってくれない



同期の仲間たちとは積み立てをして旅行会を続けてきた。右端が進藤さん

か相談してみましようか？」と持ち掛けると話に乗ってきてくれます。不動産会社を通して隣家と交渉すれば、市街地ならたいてい手狭だから買ってくれます。そこで、売却代金から解体費と税金を払っても、手元にこれだけ残りますよ」と説明すると解体に応じてくれるのです。所有者にしてみれば、住んでもいない家の管理」という重荷から解放されるのですからね」

「きちんとルールに則ってさえいけば、所有者からクレームがくることはない」というのが進藤さんの実感だ。「行政代執行」は時として悪役のごとく報道されるが、解体後、進藤さんは所有者からこう言われた——「私にとって、あなたは神様に見えます」。

市民との接点を大事に

感謝される陰には、進藤さんの「市民との接点を大事にする」という姿勢がある。空き家の所有者とも、幾度となく膝を突き合わせてきた。相手の話に耳を傾け、信頼関係を築いてきた。

市民との接点は当事者だけに限らない。

「私の仕事は、まず人に会いに行くところから始まります。人に会えば、人とのつながりができます。情報交換もできます。そうやって、自分にはない知識や能力をもつ人たち、空き家解体であれば、自治会長や不動産会社、弁護士の方ともチームになることで、困難な案件でも解決の道が拓けてくるのです」

空き家対策にしても収納推進にしても、進藤さんは「つらいと思ったことはない」と断言する。「相手がいるわけだから、喜ばれる仕事をすればいいだけ」とシンプルに考えて行動する。

「税の滞納者に対しても、はなから悪人呼ばわりするのではなく、その要因を見つけることが大事です。事業の失敗や病気で、一時的にお金が回らなくなっているだけかもしれない。そこがわかれば、後は払いやすい方法を提案して、意識を変えていくだけです」進藤さんの座右の銘は「艱難辛苦汝を玉にす」。苦勞や困難も自分を磨くためのチャンスと捉えて乗り越えていけば、いつか光る

時が来ると信じている。

切磋琢磨し合った仲間たち

深夜の帰宅が多かった総務部総合防災課では、1年間に2度も手術した。1度目は変形性膝関節症で、2度目はGI・STと呼ばれる腫瘍の切除。痙攣がおさまらず救急搬送されたこともある。

会計管理者となった2年前からは、仕事もだいぶ落ち着いていた。定年までは残すところ1年余り。だが、定年後については、まだ白紙だという。

「親が遺してくれた田んぼを耕すのも、選択肢の一つかもしれません」

国土交通省主催の「空き家対策に関する地方公共団体ワーキンググループ」で集まったメンバーとは、今も連絡を取り合う間柄。一昨年は大曲の花火に招待して、親交を深めた。

市役所の同期10人とは、毎年のように旅行会を続けてきた。一番若い進藤さんが定年を迎える今年、旅行会の40周年を記念してヨーロッパの旅を計画している。

「同期とは刺激し合い、お互いの能力を認め合いながら仕事をしてきました。組織の中で良いヨコの関係があったこと、良い仲間に恵まれたことに感謝しています」

切磋琢磨して得た一生モノの宝物は、今後さらに輝きを増すだろう。

(取材／ライター 更田沙良)